

「愛玩をはぐ」

高松市立香東中学校 二年 平子 紗雪

私達姉妹は、交代交代でしかり栞ちゃんの愛玩動物になる。栞ちゃんになでられ、とびつきり甘い言葉をもらう。

「世界でいちばん、みつきがすきだよ。」

その言葉を聞く度に、生きていてよかったと思える。芯から骨抜きにされてしまう。私は身体をひっくり返して、栞ちゃんに降参のポーズをする。

栞ちゃんに会う前、私は名前のないただの猫だった。海の見える古いバス停で、妹と暮らしていた。私と妹は、体の大きさも毛色もひとみの色もおんなじだった。見た目は一緒。でも中身は正反対だった。私は考えるよりも先に動く行動派で、妹はこわがりな分しん重で、思りよ深かった。食べるだけで精いっぱい毎日だったけれど、不幸せに思ったことは一度もなかった。

そんな時、私は栞ちゃんに出会った。栞ちゃんは私を家に連れて帰り、見たこともないようなごちそうを食べさせてくれた。

その夜こっそり栞ちゃんの家を抜け出して、バス停に帰り、嫌がる妹と交代した。見た目がそっくりな妹とかわりばんこで、ごちそうを食べる。名案だ。

栞ちゃんは私達姉妹は入れ替わっていることに気付かなかった。そうして、私達に名前を付けた。「今日から、あなたの名前はみつきよ。栞の猫になるの。」

名前なんて初めてで、くすぐったくて、何か特別なものになれた気がした。みつきという名前を口の中で転がして、優しく甘がみした。私と妹は、一日おきに、かわりばんこで、みつきになる。

はじめは嫌がっていた妹も、いつの間にか栞ちゃんが大好きになり、交代の日にはしつぽをピンと立てるようになった。そうやって、私達は栞ちゃんの愛玩動物になっていった。

だからなんだろうか。いつからか私は、私だけを見てほしいという哀願あいがんにとりつかれていた。妹とは違う自分のことを、栞ちゃんに気付いてほしかった。私はわざと、妹では届かない高い所から飛び降りたり、俊敏な動きでアピールしたりした。でも栞ちゃんは、すごいねーと拍手してくれるだけで、私と妹が違う猫だとは思ってもよらないみただった。

私はバス停の番の時、一日中狩りをした。そうしてつかまえた、鳥やとかげを栞ちゃんの机の上に置いて、栞ちゃんの帰りを待った。今度こそ栞ちゃんは、私に絶対に気付く。妹は狩りが苦手だし、こんな大物が捕れる私を、私として見てくれる。私だけに特別な言葉をくれる。

でも結果は最悪だった。栞ちゃんは悲鳴をあげ、涙を浮かべて、おびえるような目で私を見て言った。

「もう、こんなひどいこと二度としないで。いつもの優しいみつきに帰って。」

いつもの優しいみつき。それは本当に私のこと？かみつきたい気持ちでぐつと抑えて、私は栞ちゃんの手に甘がみをする。すると栞ちゃんはいつものとろけるような声で言う。

「せかいでいちばんみつきがすきだよ。みつきは私にとって、かけがえのない猫だよ。」

私を骨抜きにする言葉。私を特別ななかにしてくれる言葉。でもこの時、いつもとは違う意味と角度で、私の心に落ちてきた。

だつてみつきは、二匹いるから。私がいちばんなんじゃない。かけがえがないなんて、うそだ。私がいなくなつても、妹がいる。私は代替可能な猫だ。

それから私は、栞ちゃんが求めるみつきになろうとした。自分だけを特別にみてほしいなんていうごう慢な自分を、猫を被つて、抑え込んだ。猫を被るとは、つまり愛玩を被るということだ。愛玩の皮を被つた私を、栞ちゃんはすきだと言ってくれる。それなのに、いつからか栞ちゃんになでられる度に、自分が空っぽに思えるのは、どうしてなんだろう。

それでも、私はここに続けた。ねじ巻き玩具おもちゃのように、栞ちゃんがねじを巻いてくれるから、私は生きていけるのだ。何不自由ない暮らしなのに、満たされないと思つてしまうのは、私が強欲だからだ。空しいと思つてしまうのは、私が自分勝手だからだ。持て余すこの自意識を、うそを重ねるように愛玩の皮を厚くして、封じ込めてしまいたい。そうすれば私はきつと、完璧なみつきになれる。

ある日、交代の時間になつても、妹はバス停に來なかつた。次の日も、その次の日も、心まで凍らせてしまうような寒いバス停で、私は妹を待ち続けた。

その日は雪が降っていた。空腹と寒さに耐えかねた私は、栞ちゃんのない時間をねらつて、そつと家に入り込んだ。いつもの場所にたつぷりごはんが置いてあり、飛びつくように食べた。あまりにもお腹がすいていたせいか、後ろの気配に気付かなかつた。

「…お姉ちゃん？」

か細い声に振り返ると、そこに妹がいた。どこがとは言えないけれど、妹がまとう空気が違った気がした。妹は足取りをふらふらさせながら、ぺたんこ横たわつた。そのお腹に見たことのない大きな傷がある。

言葉を失つて立ちすくむ私に、妹はなんでもないことのように言つた。

「あたしね、避妊手術を受けたの。これでもう赤ちゃんがでなくなつて、栞ちゃんはみつきだけを一生大事にしてくれるんだつて。」

思考が追いつかない。言葉が心をすべっていく。そんな私に妹は、優しく言い含めるように言う。

「最初はこわかつたけど、もう平気。むしろ今は、幸せすぎてこわいくらい。」
「どういうこと？」と聞く私に、妹はためらいがちに言つた。

「あたし、いつか栞ちゃんに捨てられるんじゃないかつて、ずっとこわかつた。だつて、あたしは栞ちゃんに何もあげられてないのに、こんな幸せ、もらつていいはずがない。」

妹が私を見つめる。そのひとみがどこかにごつて見えるのは、私の心がにごつているからだろうか。見ていられなくて、目をそらす。

「多分、幸せって無傷じゃ手に入らないものなんだよ。お姉ちゃんだって、いつも傷だらけで私の分のごはんを捕ってきてくれたでしょう？だからこの傷は、幸せの代償で、みつきはここにいてもいいっていう証なの。」

妹は柔らかく笑っている。私は何も言うことができないまま、その場を逃げるように飛び出した。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

私を支配するこの感情は、愛玩の味に似ていた。愛玩という言葉をかんだ時の、ぞっとする感触。甘くくるまれた皮の中に、得体のしれない何かが入っている。いつそ飲みこんでしまえば楽になれるのに、私にはそれができない。はき出して、つめを立てて、ずたずたに引きさきたくなる。気付けば、あんなに食べたくてもうがなかったごはんをはいっていた。

あれから少し経って、回復したという妹と交代した。さすがに、栞ちゃんに見破られてしまうんじゃないかと思っただが、栞ちゃんは気付かなかった。それどころか、ごはんをいっぱい食べられるようになってうれしいと、たくさん抱きしめてくれた。妹がもううべき優しさを横取りしているような気がして、無傷の胸がこんなにも痛い。自分だけを特別にしてほしいなんて、わがままな哀願が恥ずかしくなる。妹への罪悪感でいっぱいになる。

雨の降る待ち合わせのバス停で、妹は愛しそくに傷口をなめていた。私は相変わらず、その傷を直視できなくてうつむいた。妹はなぐさめるように言う。

「お姉ちゃんが、罪悪感を感じなくてもいいんだよ。あたしは役に立ててうれしいんだから。それにね。」と、名案を思いついたとばかりに言った。

「いつかお姉ちゃんがお母さんになったら、それもあたしとかわりばんこにすればいいんだよ。バス停でお母さんになって、栞ちゃんのうちでみつきになる。ね？素敵でしょう？」

とたん愛玩の皮を破って、隠した心が暴れ出す。妹の言葉に打ちつけるような雨音がからんで、ますます心の奥をうつ。

私は、特別を諦めきれない。お母さんまで代わりがきくなんて、耐えられない。妹は、もうお母さんになれないのに、そんなことを思う私は最低だ。

でも、いちばんにできないことを栞ちゃんのせいにして、妹の気持ちに寄り添ったふりをして、みつきでい続けるのは、もっとひきょうで最低だ。

ひとつ息を整えて、私は言う。

「みつきになるの、もう止める。」

今日が雪なら良かったのに。そうしたら、こんなにも冷たくて悲しい言葉を、雪が優しく包んでくれたかもしれない。

妹は静かなひとみで私を見て言う。

「あたしが傷ついたから、みつきをゆずるってこと？」

違うよと言っただけれど、妹は信じてくれない。

「あんな天国みたいな場所を手放すってどういうの？」

天国とは言い得て妙だ。私はあそこでは生きられない。生かされているだけだ。命は大切だけれど、命だけがほしいんじゃない。命を使って、生きる意味がほしい。かけがえのない誰かになりたい。かけがえのない大切なものを見つきたい。子供みたいな夢物語でも、捨てきれない。ここにいたら私は、生きる理由じゃなくて、生きていてもいい理由を探してしまう。そういう私に妹は、ひげをゆがめて言う。「かけつぶちのねこじやらしに飛びつくような、単細胞ばか。生きる意味なんかに命を懸ける存在証明ばか。変な罪悪感をこじらして、何でも背負い込もうとする思い上がりばか。」

なおも文句を言い続ける妹の顔が悲しくゆがんでいく。悪口ならもつと悪い顔で言っつよ。そんな顔されたら、決心した気持ちが、涙と一緒にこぼれてしまっつ。

これだけはどうしても聞かなきゃいけなかつたから、妹をまっすぐ見つめて言っつ。

「本当の本当に、幸せ？」

妹のひとみは、くもりなく澄んで、はつとする程きれいだ。

「あたしはここで、菜ちゃんの宝物になりたい。」

そう言い切つたから、私も迷わずこたえる。

「私はこちらを出て、自分だけの宝物を見つきたい。」

もうみつきのふりも、気付いてないふりも、優しいふりも、幼いふりも、特別なふりも、あきらめたふりもしたくない。

妹は、そんなのずっと前から知つてるよでも言いたげな表情で見つめてくるから、私は思わず聞いてしまっつ。

「お母さんかわりばんこにしようつて言つたの、うそでしょう？」

私の本心を暴くためのうそ。私の背中を押すためのうそ。妹はいつだつて賢くて、とほうもなく優しい。私だつて、そんなことずっと前から知つてるんだ。

妹は肉球をなめながら、さあねとごまかす。

「答え合わせは、お姉ちゃんが宝物を見せにきてくれたらするよ。」

「わかつた。きちんと傷ついて手に入れる。」

妹はひすい色のひとみを細めて、

「傷つかないでも手に入れちゃいそうなのが、お姉ちゃんんだけどな。」

と言つて、しつぽをふりながら笑つた。

妹と別れた後、いつの間にか夜が深くなって、潮の香りにわずかに死が混じる。空には、この世界の宝物は私でもいうような満月が、神々しく輝いている。

夢を散りばめた夜のした、身体につめを立て、かみつき、愛玩をはぐ。

今、月のしつぽをつかんで、再生する。